

越後妻有郷における地域教育運動の系譜 十日町市「ゆずり葉」グループの実践

佐野 浩
Hiroshi SANO

1. はじめに

雪深い新潟の中でも最も積雪の多い越後妻有郷は、古くから教育熱心な地域として知られている。

土地の人に「妻有」の由来を尋ねると、「山と雪に閉ざされたどん詰まりの土地だから」という言葉が返って来る。一年の半分を雪に閉ざされて暮らす妻有郷では、女たちの機織りと、男たちの「江戸行き（えどいぎ）」と呼ばれる冬場の出稼ぎとが、一家の命をつなぐ生計の柱であった。

世界有数の豪雪は、豊富で清冽な水資源であり、妻有を織り物の産地として育てるだけでなく、明治以降の近代化の過程で、この地に大規模な水力発電所の建設を促すに至った。妻有は、雪深い山奥の地域でありながら、北越雪譜の昔から中央との交流が盛んで、山間の僅かな土地にへばりつくような厳しい暮らしを生きる人々の間に進取の気性を育てて来た。戦後の社会教育でもいち早く頭角を現し、地元の中核となる人材を輩出した青年学級の経営や、『豪雪と過疎と』¹⁾に代表される婦人学級の生活記録運動など、地域に根差した優れた実践で全国的に知られている。

本稿では、近年の越後妻有郷における地域教育運動の代表的事例として、十日町市の「ゆずり葉」グループの実践を取り上げ、戦後の地域と教育とがどのようにに関わり、何を成し得たのか、その実像を考察したい。

2. ボランティア・ミニコミ紙「ゆずり葉」

(1) 「ゆずり葉」の誕生

「ゆずり葉」は、十日町市公民館婦人学級OG「ゆずり葉グループ」が発行していた高齢者向けのボランティア・ミニコミ紙である。婦人学級で老後問題をテーマに学習を重ねた学級生達が、学習の発展と地域への還元を目指して取り組んだ実践である。昭和62年(1987年)7月から平成24年(2011年)6月までの25年間に亘って毎月1回発行され、十日町を中心とした越後妻有郷全域に配布されていた。最初400部から始まったこのミニコミ紙は、170名余りの会員に支えられ、毎月の発行部数は3,000部にも達し、地域の高齢者達の交流の場として重要な役割を果たしていた。

ここで言う「会員」とは、「ゆずり葉」の趣旨に賛同して毎月500円の会費を払って、このミニコミ紙の存続を支える人達のことを言う。この中には、企画や取材、編集、割り付けを行う者も居れば、

仕分けや配達を受け持つ者も居る。賛助会員として一生懸命投稿する者も、熱心な読者として支える者も居る。全体の発行部数から言えば僅かな人数と金額かも知れないが、地域のお年寄り達から寄せられたこの温かな気持ちが、「ゆずり葉」を大きく育てることになったのである。

「ゆずり葉」の手本となったのは、東村山市社会福祉協議会地域サービス事務局が発行していたお年寄り向けミニコミ紙「まつかさ」²⁾である。東村山市では、昭和49年(1974年)から医師会や保健所が協力して「老人地域サービス」を始めており、地域の老人の健康や生活を守るきめ細かいサービスを提供していた。ミニコミ紙はその「広報紙」として始まったもので、「まつかさ」は昭和51年(1976年)6月から隔月で発行され、市内在住の65歳以上の方々に配布されていた。

東村山市では、この「まつかさ」の他に「野火止だより」、「秋津だより」など同様のミニコミ紙が複数出されていた。いずれも、保健所からのお知らせや各種の福祉施設・制度の紹介、健康に関する記事、思い出の歌や読者の投稿・歌壇と言ったどこの広報紙にもある一般的な内容であるが、昭和51年(1976年)当時、お年寄りを対象としたミニコミ紙は全国的に見ても極めて異例のものであった。

老後問題を学習していた十日町婦人学級の学級生達が「まつかさ」に注目したのは、その対象とする読者が高齢者であることや、このミニコミ紙の担い手が婦人達によるボランティアグループであることだけでなく、彼女らの活動を支える地域のお年寄り達との心の通った温かな関係性にあった。東村山市の「地域住民サービス」の理念は、一方的な福祉サービスの提供ではなく、地域住民相互の理解と協力を引き出すことを目指しており、ミニコミ紙の取材・編集を地域の婦人ボランティアグループに任せたのもそのためであった。東村山市では、「まつかさ」の記事をきっかけに、お年寄りの昼食会が開かれるなど地域に交流の輪が広がっていたのである。

「まつかさ」の取り組みは、婦人学級の中で紹介され、講師の勧めや担当主事の後押しもあって、みんな乗り気になり、自分達でもミニコミ紙を出すことになった。これまでの勉強を生かして、お年寄り達の交流の場を作り、そこから老後の問題を探り深めるのが目的である。紙名も決まり、老後問題を学習した3年間の婦人学級の最終回である昭和62年(1987年)7月15日に「ゆずり葉」第1号が出来上がったのである³⁾。

こうして産声を上げた「ゆずり葉」が、この後、どのように地域に根を下ろし育って行ったのか、地域と地域のお年寄り達や担い手であったゆずり葉グループの婦人達にとって、このミニコミ紙の実践が如何なる意味を持ったのか、「婦人学級レポート集」や「ゆずり葉」各号の記述とインタビューの語りから見て行こう⁴⁾。

(2) 手づくりたよりでふれあいを

「ゆずり葉」第1号の巻頭言には、次のように書かれていた。

手づくり「たより」でふれあいを(婦人学級一同)

「老後の新しいきずなを求めて」をテーマに、公民館の「婦人学級」では、地域のお年寄りのみなさんの福祉のあり方を学習してきました。高齢化がどんどん進んでいく社会にあって、問題は

たくさん出てきていますが、今、私たちにできることのひとつとしてミニコミ（広報）活動をスタートしました。老後をよりよく生きぬく場づくりとしての役割りを果たしたいと考えております。

（ゆずり葉No.1：1）

東村山市の「まつかさ」は、社会福祉協議会の事務局が、既に地元で活動の実績があった婦人ボランティアグループに、ミニコミ紙の編集を任せられたものである。取材・割り付け・校正がその担当であり、原稿作成・印刷・配達には別なボランティアグループが担当している。公的機関の広報紙であるため、予め配布先も決まっておき、予算の裏付けもなされていた。

ミニコミ紙の企画や取材・編集を通して「住民相互の理解と協力を引き出す」のは、確かに難しい課題だが、既に地域貢献活動を行っていた「まつかさグループ」にとっては、地域住民達に自らの想いを伝え、意見を聞くための交流の機会を得たとも言えることであった。彼女達は、初めから「伝えたいこと」・「伝えるべきこと」・「伝えるべき理由」を持っていたのである。

しかし、十日町市婦人学級の学級生達は、それまで、講演を聞いたり、映画を見たり、施設の見学をしたりして、勉強し、話し合いをすることはあっても、習ったことを使って何かをするのは初めてであった。それどころか、この「お年寄り向けのミニコミ紙を発行する」という活動を通して「学習を創り出そう」⁵⁾としていた訳で、「私たちは、このミニコミ紙を通し、生涯にわたる住みよいまちづくりをめざします」との理念を掲げたものの、地域や地域のお年寄り達にどうしても伝えたい確たる何かや運営の見通しがあって始めた訳ではなかったのである。

最初始まる時、こんな風にしてミーティングしてたんですよ。ねえ。それで、いろいろなことを言ったら先生が、こんなB4の1枚の裏表だったんですね。東京の

郊外の市だなあ。

東村山市です。覚えてるんです。東村山市の福祉事務所で出した、どこから見つけてきたのか持ってきて、B4のこう折って、B5の4ページだったんですよ。こんなのぐらいだったら、あんた方も出せるでしょうと言ったんですね。そしたらみんなが、ああさうしようさうしようみたいになったんですよ。

とにかく文章さえ集めてくれば俺が何とかまとめてやるから、文章だけ、じゃ一人が一つずつ集めて来なさいみたいなので、そーんなこと言ったってどこ行って誰に頼んでいいかも分からなくて、自分で書くんじゃない、誰かに頼んで書いて来なさいって。（インタビューから）

正直に言えば、彼女達は、ずっと老後問題を学習して来て「何かしなければ」という気持ちはあったが、それほど深い考えを持ってミニコミ紙の発行を始めたのではなかったのである。

「たくさん課題をかかえながらも、まず手はじめにこうした『ミニコミ誌^{ママ}』の発行にふみきった」

(ゆずり葉No. 1 : 4) 26名の学級生達は、この学級終了の日を境に婦人学級OG「ゆずり葉グループ」として、「手づくりで」と言うより、まず「手探りで」自らのボランティア・ミニコミ紙を育てることになったのである

(3) ミニコミ紙を配るということ

企画こそは自分達で話し合い、考えたものの、「ゆずり葉」第1号は、実際の紙面の構成や割り付けなど、発行までの実務の多くを婦人学級の講師と公民館の主事達に「オンブの型」で出来上がった。内容も新しくオープンする予定の特別養護老人ホームの紹介や健康レクリエーションについての記事などが中心で、初めて「誰かに書いてもらった原稿」は、公民館の「老人俳句講座」参加者からの作品紹介というところからの出発であった。

それでも、3年間に亘った婦人学級の最後の回に、担当主事の「魔法の手」によって刷り上がった紙面の見事な出来栄えにみんなで喜んだのも束の間、さて、この「ゆずり葉」を、どこに、どうやって配ればよいのか、まずそこから分からない。

「ゆずり葉」は、そこに寄せられたお年寄り達の様々な悩みや苦しみ、喜び、知恵を取り上げ、紙上でそれらを深め合う「老後をよりよく生きぬくための場」になりたいのである。そこで営まれる温かい心の通った交流の中にこそ、これからの高齢化社会を生き抜く手掛かり、「生きられた学習」がある筈であった。そのためには何をおいても、地域のお年寄り達から原稿を書いてもらわなければならない。声を聴かせてもらわなければならない。

とにかく、まずは出来上がった「ゆずり葉」を地域のお年寄りに受け取ってもらおうと配り始めた。しかし、現実は一筋も厳しかった。

始まりの頃に全然見ず知らずのうちに届けに行ったら、「いくらいらんですか」って。そうやんだねらんでえて。

最初。最初の頃、結構言われましたね。

最初発行した時に私は、自分の近所にまあ10枚ばかり持ってって配ったんです。そうしたら、あんたっちはこうやんを持ってきて後で何か要求しらんと違うって言われたんですね。だから毎日日会って分かっている人の、町内の人なんですけど、でもやっぱりそういう疑り、後で何かお金が欲しいって言わないのって。これは自分を信用してもらってことは大変なことなんだって、そんな時、ほんとにつくづくそう思いました。(インタビューから)

これでは、とても「お年寄りの交流の場を作る」どころの話ではない。それでも、地域を良く知る公民館主事達から「あっこの(地区の)〇〇さんどこに行ってみらっしゃい」と、心当たりの顔役を世話してもらって配布先を開拓したり、知り合いから友達を紹介してもらったりするうちに、自然と玄関先であれこれ話すようになり、次第にお年寄り達とつながりが出来ていった。

出来るだけ会って。

一方的にポストに入れるんだなくて、これを出来たものを届けてやろうと思う方に届けるボランティアの方もいらしたんです。

届けるだけの人もいたんです。

届けるという部分で、ただそのうちのポストに入れるんだなくて、なるべくその読んで下さる高齢の人に直接渡して、声掛けをすとか、世間話をすとか、それがほんとに大事だったんだと思いますね。ただその家庭に、郵便受けに入れてくるっていうことでなくて、それを自分の区域内の届けたい人に「届ける」ということに。

それで、三ヶ月ぐらいしたら、いやあ書いてあるのお。何かあこのじいちゃんも書いてらんだんが、オレも書いてみっかの、みたいな。

あの人が書いたんだんが、私も書いてみようよと、そういうのがどんどん出て来たんです。

だから書いた人に昔～しの同級生とか電話すとかね。そういう交流も生まれてる。

(インタビューから)

「ミニコミ紙」のような地域の小さな手づくりのメディアにとっては、誰にどうやって配るか、すなわち誰からどうやって反響をもらうかは、ミニコミ紙を出す側の活動主体の性格や運動そのものの成否を左右する極めて重要な要素であることを、彼女達は身をもって味わうことになったのである。

「ゆずり葉」は婦人学級生達の老後問題に関する学習の発展として始まったもので、ここでのボランティアは学習の結果として生まれて来るものであり、ミニコミ紙を発行することは、学習を創り出して行くことであった(十日町市公民館1987:6)。その創り出すべき学習とは、高齢者が何に困っているのか、どうすれば良いのか、自分達に出来ることは何か、地域のお年寄り達の生きられた生活の現実から学ぶことであった。

悩みながら「手探りの活動」を進めるうちに、出来上がった「ゆずり葉」を手渡しすることをきっかけに交流が生まれ、お互いの本当の気持ちが伝わり始めたのである。ゆずり葉グループにとっては、「ミニコミ紙を配ること」、それ自体が学習であり、導きの糸であったのである。

3. 「ゆずり葉」の成長

(1) 書くことの厳しさ

「ゆずり葉」の生まれた十日町市を始めとする越後妻有郷は、生活記録運動の盛んな土地として知られている。最盛期の昭和30年代から昭和40年代に掛けて、地区ごとの婦人会などが中心となって50種類以上もの文集が発行されていた。こうした十日町を中心とする主婦達の生活記録運動に深く

関わり、『豪雪と過疎と』を世に出す力となった国立教育研究所の横山は、「生活記録」を次のように定義していた。

生活記録は、戦後主として青年の学習運動の一形態として登場してきたもので、生活綴方の方法を取り入れた一種の大衆文化運動といえることができる。記録を通じて現実の生活を見つめ、その矛盾をとらえ、解決への方途を見いだそうとするもので、単なる生活史をつづることより一歩ぬき進んでいる。とくに集団の中で集団的、社会的に問題をとらえようとする方向が出されるようになってきた点に特色がある。今日では婦人の間でも盛んに行われ、数々の貴重な記録が集積されている。
(横山1966：211-212)

ここから分かるように、生活記録は、身近な日々の生活に現れる様々な問題を社会的な問題としてとらえ、みんなで話し合い、解決するための「大人の綴方」である。見たこと、聞いたこと、感じたことを、自分の言葉で、ありのままに書き、みんなで読んで話し合い、考えて行く。この過程で、「古くて悪い概念をくぐり、新しくこのまじい概念をつくらせ」(国分1955：20)、思想を作り変え、生活や生き方を変えて行くことを目指す学習運動である。ありのままの生活を記録し、「文集」を作って配るのは、この学習を進めるために欠かせない手立てであった。

しかし、自分や家族の困りごとや悲しいこと、辛いことを「ありのままに」文章として記録し、人前にさらけ出すのは勇気の要ることである。「文集」にして配れば、学習グループ以外の思わぬ地域の誰かの目に触れることもあり、それは時に大きな波紋を呼ぶことになる。戦後の生活記録運動のきっかけとなった『山びこ学校』の無着成恭の学級でさえ、「こんな綴方を本にしたら、私たちが赤恥をさらすだけだ」、「本にしたいなら本にしてもよいが、俺のだけはのせないでくれ。きかんしゃ(学級文集)にのっただけで、こんな綴方書くもんでないとごじゃかれ(しかられ)たんだ」といった有様であったと言う(無着1951：195)。

子どもが家のことを正直に学級文集に書くだけで揉めるのだから、大人が本音を書くのは難しい。古い仕来りの残っている農村の婦人達であれば尚更である。十日町の生活記録の文集を見ても、地区名や名前を書ける人ばかりではなく、匿名のものや年齢だけのものも多いし、それすら人目が憚られて投稿を諦め、「書かなかった」・「書けなかった」人も多かったと言う。名前が無くても、内容を見れば誰が書いたか分かってしまうからである。

とにかく文集活動はどこでもいっぱいしてるけど、名前を書かない人が多いです。

結局ね、あっこの母ちゃんはこっげなこと言うてんだかと

そいのはありますね。

狭いんですよ。地域が。だから、自分が言いたくてもなかなか。書くというのは残るんですよ。

「恥かいてもいいじゃない」みたいな開き直るのは、

そこになるまでが、

それだと困る。そういう気持ちだね。

こういうふうに出ると、人様、ここへ婦人学級であろうが、講座であろうが、ここへ来ていない方が読みますでしょ。それ読んだら、今度その親戚の人がおめさんあっげなん書いて、おらの恥さらしだぞって言われて、こんなことまで書かなくてもいやんって攻撃有ったらしんですよ。それからずううっと一回も出て来なかったんです。

本音を出せないんです。

そやんですよ。

(インタビューから)

地域で書くということは厳しいものである。では、そうまでして妻有の婦人達が文集を書き続けたのは何故だろうか。妻有の婦人教育に関わった公民館主事達は、「結局のところ母ちゃん達があるのを書くのは、訴えたくて、書きたくて書くのではなく、そうせざるを得ない労働と生活の酷しさ、寂しさがあつたからであろう」(『豪雪と過疎と』p.24)と述べていた。

農業の衰退と出稼ぎの急増によって、男達の居ない豪雪の過疎の村で留守を預かる女達の厳しい生活が、婦人達に生活記録を書かせたのである。生活記録が盛んであつたことよりも、克服すべき生活の現実に立ち向かい、書くことの厳しさへ対峙することの意味をこそ見るべきであろう。

(2) 書いておかねば消えてしまう 語られたこと、思い出から思いへ

「ゆずり葉」が創刊されたのは、この地で活発に生活記録文集が発行されていた高度経済成長の時代から20年以上も過ぎた頃であつた。しかし、かつてと比べれば、時代が進み、世相も変わったとは言え、書くことに勇気が要るのは変わらなかった。豪雪と過疎の村で、女達が出稼ぎの留守を守る苦労や悲哀を「ありのまま」に書くのは辛い。だが、高齢者が豊かな社会の片隅で、次第に年老い、世の中から置き去りにされて行く孤独や不安を正直に書くことも、また、それとは違った厳しさを持っていたのである。

交流を目的として始まった「ゆずり葉」は、当初から投稿者に対して、地区名と名前、年齢の明記を求めていたから、ここに本音を書くのは、特に最初の頃は、相当に勇気が必要であつた。しかし、「ゆずり葉」は、前に述べたようなゆずり葉グループと会員達による「できるだけ会って、直接渡して、声掛けをする」という触れ合いが高齢者からの支持を広げ、発行部数も増え、「原稿が来すぎて載せられないのでページ数を増やそう」となるまでに成長していた。紙面を通じて懐かしい知人の消息を知り、それに励まされ自分も書く、投稿型のミニコミ紙として根付いていたのである。

だが、とかく老後の問題は、「解答が容易にでない気の重い問題ばかりである。絶望感も出てくる」

(婦人学級レポート集 1987：5) のは確かである。当初の目標通り、「地域のお年寄りの交流の場」となった「ゆずり葉」紙上では、一体何が語られ、書き手や読み手、作り手のそれぞれの内面にどのような変化が起こっていたのであろうか。

昭和62年(1987年)7月創刊の「ゆずり葉」の読者・投稿者は、70歳から80歳くらいの方が多かった。70歳なら大正5年(1917年)生まれ、75歳なら大正元年(1912年)生まれ、80歳なら明治40年(1907年)生まれ、ということになる。一方、「ゆずり葉」の担い手であるゆずり葉グループは50代が中心で、いずれも戦時中に小学生時代を過ごした世代である。自分達より二回りほど上の「親世代」と交流し、様々な体験を集め、紙上に掲載し、老後問題を学んで行く形である。お年寄り達同士やゆずり葉グループとが心を通わす交流の接点は、どこに在ったのだろうか。

「ゆずり葉」の紙面を見ると、健康法や食生活、趣味、歌壇・文芸欄、旅行記から始まって、段々と「昔の思い出」が語られるようになって行く。自分の住む集落の祭りや農作業の手伝い、子どもの頃に食べた懐かしい味、父母や兄弟姉妹、親戚のこと、学校の勉強や友達との遊び、雪のこと、機織りのこと、昔の農家や農村の暮らし、そうした中にぼつりぼつりと、しかし段々強く現れて来たのは「戦争の話」であった。

それは、「ゆずり葉」という場に集う誰にも共通する、決して忘れることの出来ない重い記憶であった。創刊から二年目の8月号には、原稿を書くことの出来ないお年寄り達からの「聞き書き」も加え、頁を12ページに増やして「8月15日あなたは誰とどこで何を」という特集を組んだが、それは「ゆずり葉」の読者に反響を呼んだだけでなく、ゆずり葉グループの危機感を揺り動かすことになった。聞き書きを担当した会員は、自らの体験も交え、次のように書いていた。

数人の方達にお話を伺って、当時、小学生だった私達には計りしれない苦労があった事を痛感しました。…当時の農村のくらしは、本当にみじめなものだったのです。お昼のサイレンが鳴ると腹が立ってくるという人もいました。ドロドロの南瓜の中に、米粒が浮いているのを分け与えなければならなかったのです。…家では、末の妹が生まれた時より一ヶ月後の方が目方が軽くなってしまふ状態なんです。…二十年八月十五日は、割合印象が薄い様でした。年老いた方は思い出すのも大変な様子でした。…風化しないうちに、少しでも多くの思いを書き留めておけないものでしょうか？」(ゆずり葉No.14：7)

以後、毎年8月には「戦争の記録」が特集されるようになり、平成24年(2012年)7月には、「ゆずり葉」創刊二十五周年・三百号記念として、『「戦争の記録」語り継ぐあの日あの時』が発行されるまでになったのである。「書いておかねば消えてしまう」⁶⁾とは、この本の中に書かれた言葉であった。

ゆずり葉グループ自身も、戦争と敗戦、その混乱を経験している。戦争で肉親を亡くした者も、外地の生活や空襲を経験した者も居る。「子どもの目線」で戦争や当時を見ることは出来る。しかし、夫や子どもを戦争に取られ、豪雪の中で、残された銃後の暮らしを守った母達の姿は見えても、その本当の悲しみや苦しみ、それをどう乗り越え、今日を迎えたのかは、分かっていなかったのだ

ある。子どもの時には分からない、子どもに話す訳にはいかなかったことであった。

もはや、名前や年齢を書くことなど問題にもならない。ここで語られることは、何としても書き残しておきたい、聞いておきたい大切な思い、どうしても伝え、受け継がねばならない“いのちの学び”であった。ボランティアミニコミ紙「ゆずり葉」の営みは、単なる高齢者の「交流の場」づくりではなく、歴とした地域教育運動へと成長したのである。

4. 考察

「ゆずり葉」が次第に地域に根付き、お年寄り達が命を懸け、一生涯を懸けて体得した貴重な経験や思いを紙上で共有し合い、地域を担う次の世代へ引き継ごう、受け継ごうという教育運動へと成長する姿を見て来た。

この営みを、「地域教育運動」と「小さなメディア」という観点から考察しよう。

(1) ゆずり葉は私たちがスターの気分させてくれる

「ゆずり葉」は、外形的に見れば、日本中に無数にあるミニコミ紙の一つに過ぎない。お年寄り向けのミニコミ紙であることや、25年間も発行が続けられたのは確かに珍しいことだが、市民運動を行うグループが、自らの活動を伝えるために、こうしたミニコミ紙や機関紙を発行するのは、ごく普通のことである。環境保護であれ、温暖化防止であれ、市民運動においては、活動が活発になれば、伝えたいことも増えるから、チラシを配ったり、活動を紹介する新聞を発行したりするのは当たり前のことである。運動の一環として自分達が学習したことをまとめ、それを伝えるのも、この種のミニコミ紙の大切な役割だが、それだけでは、まだ地域で営まれる市民や住民の熱心な学習運動の一つに過ぎない。

地域教育運動の最大の特徴は、「地域の再建と教育の再建をひとつのもの」として把握し、実践化、運動化をはかる点にあるとされ、住民運動と教育運動の接点として語られてきた(中内・藤岡1979:310)。では、なぜ「ゆずり葉」の実践が市民運動・住民運動ではなく、「地域教育運動」だと言えるのだろうか。

最も重要なのは、その活動の内実の高まりである。地域教育運動は、戦後の民主化とともに広まった取り組みで、「高度経済成長と地域開発政策に起因する地域破壊が顕在化してきた1960年代後半に芽生え、70年代を通じて急速に発展してきた新しい住民運動の総称である」(井上1982:20)。田村(1976)は、1970年代以降の運動は、1960年代までと比べると、「運動の担い手の拡大」と「“もの”から制度・内的要求へ」の発展という面で異なっていると指摘している。前者は、一部の当事者の中だけに止まっていた運動から、「市民自身」の運動へと担い手の層が広がったことを意味する。後者は、たとえば公園が欲しいとか、公民館が欲しいとかいった、いわゆる「もの取り」の運動ではなく、街づくりへの市民の参加・参画を求める段階にまで、運動の担い手の意識が高まったことを意味している。

では、1980年代後半に始まり、2012年まで続けられた、「ゆずり葉」の営みは、どう解釈できるであろうか。牧(1976)は、「教育は、つねにこれから先に生きるもの(あるいは生かすこと)を対象

としている。教育は、過去の人類の文化的遺産を継承し、新しい文化を創造し、新しい社会を形成する社会的営為である」(牧1976:20)と定義している。高度経済成長下の1960年代から70年代に掛けて取り組まれた環境問題は、その後、急速な高齢化の進行を背景とした老後問題という新たな環境問題へと移っていた。その中で、言うに言えない不安を抱え、取り残されていた地域の高齢者達に、老後の毎日を希望を持って生き抜き、大切な何かを引き継ぐ場を与えたのが「ゆずり葉」であった。

Kさん(79歳)の投稿を見てみよう。

私の社会大学

大正六年、小学校に入学して、十四年春、高等科を卒業し、それから今度は社会大学の一年生になりました。この大学は“生涯学習”で、死ぬまで卒業しない所です。生徒は自分一人で、周りの人達はみんな先生。本当にありがたい良い学校だと思います。

小学校から高等科が終わるまで、私は幸いにいい先生に恵まれてありがたかったと思ったのは、社会大学に入ってからです。厳しいおっかない先生が一番いいせんせいだったのです。

社会に出てからも、裁縫の先生はやっぱり厳しいおっかない先生でしたが、まわりのやさしい、楽しく話し合う人たちの中でのびのび過ごしました。

婦人会、講習会、講演会、と勉強させてもらいました。結婚して、今度は主人が担任の先生です。ずうっと続いて五十三年、本当にありがたい人でいい先生でした。私は“生涯学習”が終えたら、またこの先生のところへ行きたいと思っています。

五十三年を長いとは思っていませんでしたが、振り返ってみますと、あんなこと、こんなこと、いっぱいありました。つまり転んで痛い目に会った時は立ち上がる力を、失敗して落ち込んでいる時は、後戻りする勇気を。

楽しいこともいっぱい、いっぱいありました。この先生がいなくなって淋しいと思うことが度々あります。そんな時、こっそり仏様に向かって合掌しています。

今は「ゆずり葉」さんが私にとっていい先生です。はげまされ、はげまされて、元気づけてくれます。私も何とかついて行きたいと念じております。「ゆずり葉」さん、お元気でがんばってください。

—合掌 (ゆずり葉No.31:2)

Kさんは、「ゆずり葉」の5周年の集いの際に、野良着姿で壇上に立つと、「ゆずり葉さんは私たちをスターの気分にしてしてくれる。作家の気分にしてしてくれる。本当にありがとう」と話したという。「ゆずり葉」は、地域の高齢者達の人生に意味と価値、希望を与えたのである。

三輪(1980)は、地域教育運動とは、「地域の課題を学び、相互の連帯を広げ、教育の地域的個性を育て、『住民形成の教育』を促進する地域の集団的实践である」と述べている(三輪1980:123)。

「ゆずり葉」は、Kさんを始めとする地域のお年寄り達を、自らの人生の主人公にし、生きられた生を形成する手助けをしていたのである。この大切な学びは紙面を通じて、地域と地域の人々に深く、広く共有されていった。「ゆずり葉」は、妻有の地で営まれていた「生活記録運動」の遺産を継承・

発展させた、協働と参加の場、歴とした地域教育運動であったのである。

(2) 市民が自前のメディアを持つということ

こうして「ゆずり葉」が地域教育運動として花開くには、妻有の地にそれ以前の婦人達の学習運動、すなわち、ありのままの生活記録を書いて文集を作り、話し合い、考え合うという運動があったことは、先に述べたとおりである。ここでは、ゆずり葉の婦人達が、手づくりの自前の小さなメディアを手にしたことの意味を、生活記録文集の場合と比べながら考えてみよう。

大人が綴方を書く生活記録運動は、『山びこ学校』が発行された1950年代後半に大きな広がりを見せ、その後、急速に衰えたと言われている。横山（1987）は、次のように述べていた。

「生活記録」は、一九六〇（昭和三五）年を迎える前には、ゆきづまりとか壁にぶちあたったといわれるようになり、「いつまでもこんなことやっていたってしょうがないではないか」という疑問や批判が内外から高まり、急激に衰退していった。（横山1987：28）

ところが、北河（2014）は、「成人女性の生活記録についての研究は限られるが、岩手、秋田、山形、新潟、長野の動向をみると、一九五〇年代後半から六〇年代にかけてむしろ活発化している」（北河2014：10）と述べている。本稿で取り上げた十日町を始めとする越後妻有郷の場合は、地域の婦人達の学習意識の高まりに加えて、各公民館や分館の主事達や山奥の冬季分校の教員達など、婦人教育に尽力した社会教育関係者の努力が実ったと言えるだろう。

出稼ぎ先の男達に宛てて、冬季分校の教員達が子ども達に父親への手紙を書かせる。留守を守る母親達にも書いてもらう。それをガリ版で印刷し、文集を作って、都会で働く男達の元へと送り、次は父親からの返事も載せて行く、といった具合である。冬季分校は公民館の分校を兼ねているところが多く、教員達も仕事を分担していた。文集を作るのは生活教育の一つでもある。部数もそれほど多くなく、紙代と切手代くらいの経費は、社会教育の予算で工面出来たのである。

婦人会の生活記録文集も同様であった。中魚沼郡・十日町市婦人教育研究グループを結成した主事達は、積極的に予算を獲得し、次々と事業を企画・推進していた⁷⁾。まだ婦人会に出られない嫁達が1冊のノートに手書きしたものを姑の目を盗んでこっそり回していたところでも、主事達の助力で「若妻会」が作られ、ガリ版で文集を出すようになり、オフセット印刷してもらえるようにもなった。しかし、活動の範囲を広げ、外から会費を集め、経費の面でも自立して生活記録運動に取り組むところは多くはなかった⁸⁾。

文集というメディアは、それを沢山印刷し、広い範囲の大勢に配って互いに交流し合い、学習を深め合い、連帯を創り出す力を持っている。しかし、主事達や関係者の努力にも関わらず、原稿を書いているのは確かに婦人達だが、文集というメディアを発行すること、配布すること、つながり合うこと、すなわち学習のためのメディアを使いこなすという面においては、まだ主事達や公民館の事業に頼っているという側面もあったのである。

「ゆずり葉」の場合はどうであっただろうか。

悩みは、原稿がどんどん来すぎて、

来すぎて。(笑い)

どうしようかと。それを溜めておくと、亡くなってしまった方もいらっしやった。

そうやんですよ。年行った方々とかね。

そういうのがあったりして、なるべく、

消化しようということで、ページを増やし始めたんです。本当は4ページって言うことで始めたんですけど、

ボランティアですので。何をやるにもやっぱり金銭のこと、経済的の問題もありますのでね。

そう。

4ページとしても半裁でも入れれば、もう1ページ増やしてもそれだけお金かかりますでしょ。いっくらボランティアゆっても、紙代と印刷代くらいは払わなきゃいけない。

公費は最初の3号。

あとは一切出てません。

で、寄附をもらおうかってゆったんですけど、考えみたら、寄附もらっちゃったらその言いなりにならんきゃなんないからそれは止めようって言って。

市の補助金もらったらどうだって言われたけど、補助金をもらうってのは、非常～に面倒くさいんです。

大体、ひも付きになるってのはやだって

本当に、報告ですか、結果報告。申請をしてさらに使用したという結果報告を出す。決算報告出さんきゃいけない。

ほんつとに。

ま、そっげな面倒くせえやんしらんたっていやん。ハハハ。

役所の金をいただくってことは容易じゃねえことなんですよ。

自分たちで努力してお金集めようという。

自分たちでやればいいってことで始めたら、どんどん会員が増えていって。あのね、お年寄りの方は義理堅いんです。ただ読ましてもらってもねえ、

そうだよねえ。要らない要らないって言ってもねえ。

月500円くらいだったら、私も小遣いを節約して会員になって会員として、自分も仲間になって、ということがうれしいって言われた人が何人かありましたから。やっぱり、参加することの意義でしょうかね。

メディアとは、言うまでもなく情報を伝える媒体である。新聞や雑誌、ラジオやテレビ、映画のような大きな商用メディアが、地域の片隅に居るお年寄りの暮らしや思いを継続的に取り上げることは難しい。市役所や福祉協議会の発行する地域の公的な「たより」でも、まだ声が届かない。しかし、市民がミニコミ紙という自前の小さなメディアを持つことによって、当事者であるお年寄り達自身の社会参加と市民との協働・連帯が可能になるのである。

せっかく作られても後が続かず、「3号雑誌」に終わるミニコミ紙は多い。地域に根付き、支持を集め、会費を頂いて長く継続するミニコミ紙は珍しい。市民が自前のメディアを持つことは、そこに自立した市民が育ったことを意味する。「ゆずり葉」はその一例であろう。

5. 結びにかえて

人と人が分かり合い、力を合わせるためにはコミュニケーションが欠かせない。「ミニコミ」という言葉は、「『マスコミ』という大きなジャーナリズムに対する、Mini Communicationという和製英語の略」（南陀楼1999：10）である。プロの手になる商用メディアであるマスコミは、不特定多数の読者を対象とする性質上、一般的で中立でなければならない。それがマスコミと言う大きなメディアの特性であり、地域の少数の弱者の側に立つ当事者性は持ち得ない。本稿で取り上げた「ゆずり葉」のようなミニコミ紙を呼び出したのは、そうした地域の問題に気づき、自分達の問題として解決しようとした自立した市民達の自己教育へのエネルギーであった。

大きなメディアには大きなメディアの役割があり、小さなメディアには小さなメディアの役割がある。ミニコミと愛称される市民の手づくりの小さなメディアであるミニコミ紙には、地域の未来を切り開くという使命があるのである。

老後問題への学習をきっかけとして、地域と地域の人々に大切なものへの気づきを与え、惜しまれながら終刊したミニコミ紙「ゆずり葉」は、戦後の地域と教育とが成し得た一つの到達点と言えるのではないだろうか。

参考文献

- 1951 無着成恭編『山びこ学校』青銅社
1955 国分一太郎『生活綴方ノートⅡ』新評論社
1966 横山宏「生活記録」, 相賀徹夫『教育辞典』小学館, pp.211-212.
1971 牧征名「国民の教育権」, 『講座日本の教育10』新日本出版
1976 田村武夫「地域教育運動の実践と課題」日本教育社会学会大会発表要旨集録28, p.135.
1979 中内敏夫・藤岡貞彦「発達を保障する教育運動と教育計画化」, 岩波講座『子どもの発達と教育7』岩波書店, pp.279-324.
1980 三輪定宣「地域教育運動と教育の住民自治」, 自治体問題研究所『地域・自治体問題講座 第6巻』自治体研究社
1982 井上英之「地域政策の展開と地域教育実践」, 『地域教育実践事典』第5巻, 労働旬報社
1987 十日町市公民館編『地域の老後福祉を考える 婦人学級レポート集 1987』十日町市公民館
1999 南陀楼綾繁「われわれはなぜミニコミを作るのか?」, 申間努編『ミニコミ魂』晶文社, pp.10-24.
2012 ゆずり葉グループ『「戦争の記録」語り継ぐあの日あの時』
2014 北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動』岩波書店

注

- 1 『豪雪と過疎と』は、昭和51年（1976年）に未来社から発行された新潟県十日町周辺の主婦の生活記録集である。編者の「妻有の婦人教育を考える集団」の中心は、妻有郷で働く社会教育主事達で作る「中魚沼郡・十日町市婦人教育研究グループ」であり、本誌は彼らが関わって来た地域の婦人学級が昭和30年代から昭和40年代にかけて綴った生活記録作品の紹介とその解説である。
- 2 「まつかさ」の概要については、「お年寄りにミニコミ紙十年」（朝日新聞1985年10月19日14頁）に依った。
- 3 十日町市公民館『婦人学級レポート集1987』p.8. および、ゆずり葉グループへの聞き取りから。
- 4 ゆずり葉グループへの聞き取りは、平成26年（2014年）10月に十日町公民館で行った。約束の日時に行ってみると、編集・校正・筆耕を担った主要メンバーの他、当時の公民館主事ら関係者も集まってくださり、和やかな座談会となった。その後も訪問や電話での聞き取り、手紙のやり取りを重ね、各種資料も見せていただいた。
- 5 十日町市婦人学級を指導していた講師の松田鐵夫の言葉。「ミニコミ紙の発行は、学習を創り出していくためのものである、ミニコミ紙を発行しながら、高齢化社会の問題、高齢化に向けての地域社会の問題を掘り起こし、学習活動を創り出していく。…発行活動の中で新しい分野への活動と学習が生まれる」（十日町市公民館『婦人学級レポート集1987』pp.4-6.）
- 6 文中の『「戦争の記録」語り継ぐあの日あの時』に収録された「出征兵士を送る壮行会のこと」（p.341.）に寄せられた言葉である。「ゆずり葉」に寄せられた投稿は、先に生きた者が、後に続く者へ託す証言のような積りで書かれたことが分かる。
- 7 平成25年から26年に掛けて、当時、越後妻有郷で社会教育・婦人教育を先導した「中魚沼郡・十日町市婦人教育研究グループ」の主事達に複数回、聞き取り調査を行った。社会教育の地位向上を目指して、夜間や休日に研修会を行い、予算獲得や新事業の推進に燃えていたそうである。
- 8 昭和36年（1961年）6月から始まった津南町の「べんきょうするお母さんのひろば」は、地域の主婦達が集まって発行している優れた実践である。このミニコミ紙は、購読料を集めて発行しているが、こうした事例は珍しい。